

蔡の祈禱所

紀伊徳川家と高尾山

明治大学博物館 外山 徹

15

重倫所勞快然の祈禱

明和九年(二七七二)八月二十八日。春の八千枚護摩供の利益があつたか、八代藩主重倫に待望の三男雅之助が誕生した。この誕生日を「南紀徳川史」は八月晦日のこととしている。出生は当初家中にも伏せられていたというので、それが日付の違つた理由とも考えられるが、実物の古文書から得られる情報であるが故の歴史のリアルを感じる。

所勞快然の祈禱

引き続いて雅之助と産婦のお八百に対する無事な肥立ちに関する祈禱が依頼されるようになった。前年来、相次いで子を亡くしていた重倫にとつては雅之助の誕生は吉瑞であつたが、身体の不調は

一向に快復しなかつたようだ。前号で取り上げたその年の暮れ十二月八日付の書状においても、まずは「紀伊殿所勞早く快然これあらせうろうよう、ご祈禱絶えず執行」が記され、その後雅之助・お八百に対する祈禱が記されている。依然として体調の不良は続いていたのである。続いて同月二十九日付の書状(写真)を取り上げる。

一筆致啓達候然者

此表御出立前御申越候八千枚護摩供并御星供御執行可被成哉之儀右及取計候処八千枚護摩供并御星供両様共御執行被成様二との御事二候間御執行被成御札守護御指



八千枚護摩供・星供の執行決定を伝える書状

一筆啓達します。しかるは、この表を「出立前に申し述べます。八千枚護摩供と御星供を執行されるべきかの件、これを取り計らいに及んだところ、八千枚護摩供と御星供の両方ともご執行なられるようにとの事になりましたので、ご執行になり、御札・守護をお指し越しになるよう、これにより申し伝えます。

「この表」とは

紀州家の屋敷の側のことだが、その解釈については後程として、まず、書状の趣旨から見よう。文脈からすると八千枚護摩供と星供の執行について、先に葉王院の側から申し出があり、それに対

し、「及取計」の内容は不明だが、その結果双方とも執行することになったので、執行の上、御札・護符を届けるようにということである。

これに先立つ書面のやりとりとして、二六日付で浅井から葉王院に宛てられた書状も残る。史料集では年不詳とされているが、内容と月日からこの時のものと言え、それによると、葉王院からの「ご別紙拜見いたしうろう」に続き、紀伊殿来年は羅睺の凶星にあい当たられそうろうつき、星供ご執行ならるべきや、または年中諸障りの却除をおん兼ね、八千枚護摩供をご執行ならるべきや、星供も通行の除障お勤めそうろう内、八千枚護摩供・諸天曜宿をお祭りそうろう事ゆえ、別して御除災として最勝の行事につき

とある。これが先の申し出の具体的な内容ということになる。

星供とは?

「羅睺の凶星」とは何か? 星供(星祭)のことについて少し触れておきたい。今年も十二月二日・二二日の両日にわたつて予定されている行事であるが、すでに江戸中期にはこのように形で史料に登場する。ただし、管見の限りで他に類例はなく、当時、日を決めておこなうような恒常的な行事であつたかは不明である。

江戸藩邸の訪問

加え羅睺星(凶運)、土曜星(半吉運)、水曜星(大吉運)、金曜星(半吉運)、日曜星(大吉運)、火曜星(凶運)、計都星(凶運)、月曜星(半吉運)、木曜星(大吉運)の順で、年ごとに巡つて来るその星によつて運氣が左右されるものとしている。そのため凶運の年を前にして災厄消除の供養をおこなうというのである。

今日なお占星術がポピュラーであるが、古くから天体の動きによつて人の運氣が左右されると信じられてきた。天体を崇拜する考え方は奈良時代以前にも入つていたが、空海が密教を伝えた後に体系化された。平安期には釈迦を中心北斗七星、九曜、星座十二宮・二十八宿に相当する仏神を配置した星曼荼羅が作られるようになる。

一九日付書状の冒頭に「この表(出立前)」という文言があつた。これだけでは、「この表」とはどこだかわからないが、二六日付の浅井からの別の書状には「明日はこの表(出立前)を寒中別してご旅行(ご大儀存じ奉りそうろう)」「随分寒気おしのご御山着き成られそうろうよう」と記されている。つまり、「この表」を出立すべき書状の宛所の人物は「葉王院」、すなわち山主秀興のことであり、旧

暦の十二月末であるから、今日では二月の寒中ということになる。「御山」とはもちろん高尾山のことであるから、その道中について気遣つた内容である。この場合、出立すべき「この表」とは、浅井にとつての具体的な場所や地名が示されていないからには紀州家の屋敷近くと推定される。そうすると、書状にある安永元年の十二月二十七日までのしばらく、山主秀興は紀州家を訪問するため江戸に滞在していたことになる。



上方が上屋敷、下方が中屋敷 藩主へのお目見えとなると上屋敷を訪れたか(「帝都復興記念分間大江戸絵図」明治大学博物館蔵)

の訪問も祈禱依頼に対する返礼の意味も込めてのお目見えであつた可能性も無くはないだろう。また、話は先走るが、翌年、山主秀興が権僧正に補任されるため京都に参向することも関係していたかも知れない。

この安永二年の秀興上京にも紀州家は関与している。次回はその注目をしよう。

おこわり 本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。